

ソクラテスのダイモニオンについて(四)

—ダイモニオン伝説の誕生—

田中龍山

第五章 ダイモニオン伝説 —ソクラテス擬書、キケロ『占いについて』の考察—

これまでの考察によると、ソクラテスの死後、彼の生き方を後世に伝えようという共通の意図のもとで、じつにさまざまな異なったソクラテス像が形成されたようである。そしてそれらに応じて、ダイモニオン理解も異なった様相を呈していると言えるだろう。さらに、わたしたちの手元には届かなかったが、ソクラテスをめぐる著作が他にも数多く書かれていたようだ。三世紀前半に活躍したディオゲネス・ラエルティオスは、その著『ギリシア哲学者列伝』のなかで、前二世紀のストア派の学頭パナイテオス（前一八五年頃—一〇九年）の見解としてつぎのような証言を伝えている。

「ところで、パナイテオスは、すべてのソクラテス対話篇のうちで、プラトン、クセノポン、アンティステネス、およびアイスキネスによって書かれたものは真実であると考えている。だが、パイドンやエウクレイデスが書いているものについては、彼は疑いをいだき、またそれ以外の他の作品についてはすべて否定している。」⁽¹⁾

これまでに考察したプラトンとクセノポンを除くと、残念なことに、それ以外の「ソクラテス対話篇」は断片がいくつか残されるだけである。それらにどのようなソクラテス像が描かれていたのか、詳細を知ることがはきない。けれども、パナイテオスがそれらを「真実である」「疑う」「否定する」と区別していることからしても、より多様なソクラテスのすがたが描かれていたであろうと推測はできる。そして、これらソクラテスの記憶をどめようという意図で書かれた「ソクラテス書」は、プラトンの晩年にあたる前四世紀の中頃に終焉したと言われる。だが、ソクラテスについて語られなくなったわけではない。むしろ、きつとそれら「ソクラテス書」をもとにしてのことであろう、ソクラテスを直接には知らないひとたちも、ずっとソクラテスについて書き続けたのである。多くのひとがそれぞれのソクラテスを語つたのだ。それらを本論では、「ソクラテス書」を擬して書かれたものとして、「ソクラテス擬書」と呼ぶことにする。もつとも、その著者や年代が正確に特定されないものが多く、また、実物に接していない以上、そこに描かれているソクラテスは実像とは離れたものかもしれない。しかし、逆にそれだけに、たいへん興味深いものもある。「ソクラテスのダイモニオン」に関して言えば、それがどのように伝えられていったかを知る貴重な資料と言えるだろう。それらのうちのいくつかを取り上げ、考察していくことにしよう。

擬プラトン『テアゲス』

まず最初に『テアゲス』という対話篇を見てみよう。この作品は、後一世紀にトラシユロスがまとめた「プラトン著作集」のなかに含まれてはいるが、今日では一致して偽作と認定されている。真の作者については、プラトンの時代に学園アカメイアの弟子によって書かれたとする説と、前二世紀ごろにプラトン読者のうちのひとりによって書かれた作品とする説に分かれるようである。対話篇『テアゲス』でソクラテスの対話相手をつとめるのは、公職を退いたあと裕福な隠遁生活をすごすデモドコスと、その息子テアゲスである。父デモドコスは、息子テアゲスを知者に

しようと、彼の教育をソクラテスに依頼しようとする。そして、そのテアゲスの求める「知」について、それが何であるか、ソクラテスを中心に対話が展開されていく。副題は、「知恵について」である。そのなかでソクラテスは、すこし議論の主題からはずれるかたちで、自分がこれまでにもすすしてきたひとたちとの経験談を語る。そこで、「ソクラテスのダイモニオン」にまつわるいくつかの事例が示されるのである。それはあたかも、この対話篇の主題であるかのようにも見える。⁽⁶⁾

さて、『テアゲス』のなかで最初にダイモニオンが語られるのは、「国家社会のことにかけての知者」になるために、デモドコス親子はソクラテスと「ともにすすすこと (συνεΐναι)」⁽⁷⁾を望んで相談にくるが、ソクラテスは躊躇する。その理由を語る場面においてである。ソクラテスはつぎのように言う。

「神の定めのようなもので、わたしには、子供のころから (ἐκ παιδός) 始まって、ダイモニオンが付きそつているのだ。それは声 (φωνή) であつて、それが現われる時にはいつも、わたしがしようとしていることをさしひかえるようにわたしに合図し、それをすすめることはどんな場合にもないのである (ὁ δὲ μέλαινα πᾶστέστιν τοῦτον ἀπορροπήν, πορριπέει δὲ οὐδέποτε)」⁽⁸⁾

ここで語られていることに関しては、第二章で考察したプラトン『ソクラテスの弁明』で描かれている内容と、言葉づかいを含めて、ほぼ同じである。確認しておこう。

「これはわたしには、子供のころから (ἐκ παιδός) 始まったもので、一種の声 (φωνή τι) となつて現われるのだ。それが現われる時にはいつも、わたしが何かをしようとしているときに、それをわたしにさしとめるの

であつて、それをすすめることはどんな場合にもないのである (*dei dnoipéteu ie touro o du méllou*⁽⁹⁾ *npátreu, npoipéteu de ourore*)」

つまり、ダイモニオンが「声」であること、また、ソクラテスが「しようとしている」ことをさしひかえさせ、けつしてするように命じることはないこと、さらには、「子供のころから」のものであること、これらの特徴は、ふたつの対話篇に共通する。⁽¹⁰⁾ しかしながら、『テアゲス』でさきの引用につづいて語られることのなかには、まったく新たな要素が加わってくる。

「また、友人の誰かがわたしに相談にきて (*anakouútra*)、その声が現われる場合でも同じことだ。それをさしひかえさせ、することを許さないのだ (*dnoipéteu kai ouk eú npátreu*)」⁽¹¹⁾

この証言だけでは読み取りにくいかもしれないが、大きな違いがある。ダイモニオンは、ソクラテス自身がしようとしたことに対してソクラテスに現われるだけでなく、ソクラテスの友人が何かをしようとしたことに対してソクラテスに現われる、と言われているのである。⁽¹²⁾ ここでのダイモニオンは、他人が意図した行動を禁止させる声でもあるのだ。

もつとはつきりと語られている個所を見てみよう。さきの言葉につづいて、ソクラテスは、そのように他人の行為を禁止するダイモニオンが現われたにもかかわらず、それに背いたばかりに、その当のひとに善くない結果が生じた事例をいくつも挙げる。

「カルミデスはかつて、メネア競技会のレースの練習をしようとして (μέλαου δοκῆσειν)、わたしに相談にきたのだ (ἀνακουροῦμενος)。そして、彼がこれから練習をするつもりだ (μέλαλοι δοκείν) と言いはじめるやいなや、その声が現われた。」

カルミデスとは、プラトンの対話篇『カルミデス』の主役でもあるが、やがて政治家となって「三十人独裁政府」に加担し、後に滅ぼされることになる人物である。そのカルミデスは、この引用のつづきによると、ソクラテスの忠告を受け入れずに練習をした。その結果について、対話篇では明らかにされていないが、「カルミデス自身に尋ねてみる価値がある」とソクラテスが述べているところを見ると、よくないものであったことは容易に窺い知れる。ともあれ、ここで重要なのは、カルミデスが「くししよう」としたことに対して、ソクラテスに「その声が現われた」という点である。そして、ひとつ前の引用に戻ってみると、やはりソクラテスの友人が「相談にきた」のは、彼が何かをしようとしてであることが明白に読み取れるであろう。

また、別の事例として、とある殺害を企てていたティマルコスという人物がそれを実行に移そうとしたさいの、ソクラテスとのやり取りが語られている。酒宴に参加していたティマルコスが、「殺害するために (τροχευούμενος)」その場を立ち去ろうとしたときのことである。ソクラテスはこう説明する。

「するとわたしにあの声が現われたのだ。そこでわたしはティマルコスに向って言った。「いや、決して立つてはならない。というのも、わたしにいつものダイモニオンのしるしが現われたからだ (Μου το εἶδος ὀφείλει τοῦ δαιμόνιον)」。すると、彼はさしひかえた。そしてそれからすこしたつと、ティマルコスは再び行く気になって (ἀφῆκετο λέναι)」。では行くよ、ソクラテス」と言った。もう一度あの声が現われた。そこでわ

たしはまた彼を無理にひきとどめたのだ。三度目には、彼はわたしに気付かれなようにと思い、わたしがほかのところを気を取られているあいだに、もうわたしには何も言わないで、ひそかに立ち去ったのだ。彼はそのようにして立ち去つていくと、ことを果たして、それで死んでいったのだ⁽¹⁷⁾」

ここでは「殺害するために (*drokreoubres*)」という目的を表す未来分詞や、「する気になる (*qian + inf.*)」といった表現が用いられているが、同じく、ソクラテス自身ではなく彼と一緒にいたひとの行為に対して、ダイモニオンは現われたのである。そして、ソクラテスの忠告、いや正確に言う、ソクラテスに生じたダイモニオンの合図に背いたティマルコス、殺害には成功するものの死罪に処せられることになったのである。

さらに、歴史的な出来事とも関連させながら、いくつかの事例が示される。かつてのシケリア遠征⁽¹⁸⁾（前四一五—四一三年）は、ソクラテスのダイモニオンの合図に逆らつて挙行され、アテナイ軍は壊滅したこと、また現在進行中の話として、エペソスに遠征しているサニオンなる人物も、彼の出征時、自分に生じたダイモニオンゆえにその安否が気がりであること⁽¹⁹⁾、これらをソクラテスは語るのである。そのうえでつぎのように言う。

「さて以上のことをすつかりあなたに話したのは、このダイモニオンのこのような力は、わたしとともに時をすこすひとたちとの交際にまで全面的に作用が及ぶからだ (*eig tas sunovias tau met' ehou svudartpōvtau tò dnav sūvtau*)。じつさいそれは多くのひとたちに対して反対するのであつて (*pollōis hēu yāp svuvōiōtau*)、そういつた多くのひとたちにとつては、わたしとともにすこしても利益を受けることはなく、したがつてわたしは彼らとともにすこすことはできないわけだ。……………」

他方、ひとによつては、ダイモニオンの力がわたしと彼らがともにすこすことを助けるようなひとたちもいる

のであって、あなたもまた気づいているようなひとたちがそれだ。すなわち、彼らは急速な進歩を遂げるのだ
 (ταχὺ γὰρ παρακοίμια ἐπιδιδάσκειν) ⁸⁰

ここでは明確に、「ダイモニオンのこのような力は、わたしとともに時をすごすひとたちとの交際にまで全面的に作用が及ぶ」と語られているのである。たしかに、ダイモニオンがソクラテスの周辺人物に影響を及ぼすことについては、第二章で取り上げたプラトン『テアイテトス』のなかで、類似したことが語られていた。それはこうだ。

「そういうひとりにリュシマコスの子アリストイデスがいて、その他たいへん多くのひとたちがいる。もしそういったひとたちがもう一度やってきて、わたしとともにすごしてほしいと願い、あきれるようなことまでして見る場合、わたしにいつも現われるダイモニオンは、そのあるひとたちとはともにすごすことを妨げ、他のあるたちとはともにすごすことを許すのだ (ἐπιούρ μὲν τὸ γρηγορέων μοι δαίμονον ἀποκαλύθει συνέβαιναι, ἐπιούρ δὲ ἐγὼ)。そして後者のひとたちはふたたび進歩を遂げる (πάντῃ οἱτοὶ ἐπιδιδάσκειν) ⁸¹

『テアゲス』の内容と同様に、多くの友人が「ソクラテスとともにすごすことを求めて (δεόμενοι τῆς ἐπιούρ συνοουίας)」やってくるのが語られているし、また、ダイモニオンがソクラテスとの交際を許した人たちは「進歩を遂げる (οἱτοὶ ἐπιδιδάσκειν)」という点も同じである。しかし、『テアイテトス』では、友人たちがソクラテスとともにすごすこととしたことに対してではなく、それに対応しようとしたソクラテスに、ダイモニオンがあらわれる、あるいは現われないというかたちであった。⁸² つまり、あくまでもソクラテス自身の意図した行為にダイモニオンが関与し、その結果として、ソクラテスの周辺の一とたちに利益が与えられたり、与えられなかったりしたのである。そ

れに對して、この『テアゲス』でのソクラテスの言葉や、ソクラテスが挙げた事例は、ことごとく異なっていると云つていい。¹⁰⁴ いずれの事例においても、對話相手が「しようとした」ことに、ダイモニオンがソクラテスに現われるのである。ひよつとするとこのことも、『テアゲス』が偽作と認定される根拠のひとつとなるかもしれない。

(擬) プラトン『第一アルキビアデス』

ところで、『プラトン著作集』のなかには、今日その真偽性がなお議論されている『第一アルキビアデス』という對話篇が含まれている。そこでも、ダイモニオンによってソクラテスとともにすごすことが許され、利益が与えられることが約束された人物が登場する。對話篇の書名ともなっている、かの有名なアルキビアデスである。この對話篇について、論者のなかには、さきの『テアゲス』と同様に、学園アカデメイアの学生によって、しかも年代を限定して前三四〇から前三三〇年に書かれたのではないかと推測する者もいるようだ。¹⁰⁵ さしあたり真偽性については留保したまま、『第一アルキビアデス』で語られるダイモニオンについて、これまでの議論を踏まえて考察してみよう。

この對話篇で主役をとめるアルキビアデスは、本当にいろんな点で有名人であつた。¹⁰⁶ そのせいなのか、『プラトン著作集』のなかには、同一人物を主役とした『第二アルキビアデス』と呼ばれる偽作がもう一冊ふくまれている。また、この章のはじめに挙げた『ソクラテス書』の作者たちのうちでも、アイスキネス、エウクレイデス、アンティステネスの三人が『アルキビアデス』という對話篇を書いたと伝えられる。¹⁰⁷ ソクラテスとアルキビアデスとの関係はどのようなものであつたのか、この『アルキビアデス問題』は、当時の大きな関心事であつたようだ。¹⁰⁸ というのは、若いころソクラテスとともにすごしたアルキビアデスは、のちに政治家として、また軍人として、たしかに活躍はするものの、むしろ野心の強さと無節操ぶりが際立ち、¹⁰⁹ ついには祖国アテナイを裏切り、アテナイ人たちに大きな害を与えることになつたからである。アルキビアデスは、『ソクラテスへの訴状「青年たちを腐敗させる」で言われている

「青年」のひとりときえ目されている。⁽²⁾

しかしながら、この『第一アルキビアデス』に登場する彼は、ソクラテスとの交際を望む美青年アルキビアデスである。すでに第三章で考察したプラトンの真作『饗宴』に出てくるアルキビアデスと、ほぼ同じような人柄が描かれている。アルキビアデスの美貌は当時のアテナイではそうとう有名だったようで、多くのひとたちが彼との交際を求めてアルキビアデスのところにやってきた。しかしながら、アルキビアデスはその気にならず、彼らは退散していく。そのようななか、これまでアルキビアデスに対して何のそぶりも見せなかったソクラテスが、彼のもとにやってきて、アルキビアデスは自分との交際によってこそ優れた人物になるであろうことを、臆面もなく主張するのだ。そして、それができたのは、かのダイモニオンのしるしがあつたからなのである。ふたりのそのやり取りはこうである。

ソクラテス「わたしの後見人はあなたの後見人ペリクレスよりも優れていて、またより知恵があるのだ」

アルキビアデス「それは誰のことですか」

ソクラテス「それは神 (θεός) だ、アルキビアデス。今日のこの日まであなたと対話することを許してください
 らなかった (οὐκ εἶα …… διαλεξθῆναι) その方だ。この方を信頼してわたしは、あなたが名声を手に入れる
 ようになるのはわたし以外の他の誰によつてもない、と言うのだ。⁽³⁾」

ペリクレスとは、アテナイの黄金時代を築いた政治的指導者で、アルキビアデスの親戚にもあたる。そのペリクレスよりもすぐれた後見人であり、ここで「あなたと対話することを許さなかった」と言われている神とは、まぎれもなくダイモニオンのことをさす。そのダイモニオンがいまは許しを与えたのである。このことは対話篇の冒頭でつぎのように言われていた。

「クレイニアスの息子（アルキビアデス）よ、思うのだが、あなたは不思議に思っているだろう。わたしがあなたの最初の恋人になって、他のひとたちはあなたをあきらめたのに、わたしひとりだけがはなれずにいるのだから。また、他のひとたちときたら、取り囲んであなたと話をしていたのに、わたしはと言えば、これまでずっと話しかけもしなかったのだから。けれども、話しかけなかった理由は、ひとが反対したからではなくて、むしろとあるダイモニオンの反対があった（*γέρονες οὐκ ἀφώρμητον, ἀλλὰ τὴ δαυδύριον εὐαρκίαν*）からなのだ。その力については、またあとであなたに話すことにしよう。ただいまはもうそれが反対をしない（*οὐκ ἐστὶ ἐναντιότατα*）から、こうしてあなたのところに来ているのだ。ダイモニオンはこれからも反対しないだろうと、わたしは樂觀している」⁶¹

この証言から、ソクラテスは、ダイモニオンの二通りの指示に従ったことが見て取れる。そして、これまでの考察を頼りに言葉を補うと、こう言えるだろう。まず、「これまでずっと」、ソクラテスがアルキビアデスに「話しかけようとしたときに、ダイモニオンがソクラテスに生じた。だから、ソクラテスはそれを「ダイモニオンの反対」と理解し、話しかけることをやめた。だが、「いま」話しかけようとしたとき、ダイモニオンは現われなかった。ソクラテスはそれを「ダイモニオンの許し」と理解し、アルキビアデスのところに来ている。対話篇を読み進めると、ここでの「いま」とは、アルキビアデスが政界入りの資格を得る年齢となる数日前であり、また、アテナイの演壇に立つ用意をしているときであることが分かる。そこで何を話すか、そのための助言を必要としているときである。他方、それより以前の「これまでずっと」とは、アルキビアデスがもつと若かったころであり、何事にもひとの助けを必要とせず自信に満ちていたころである。これらの点をふまえると、おそらくソクラテスにはつぎのような推論が成立していたのであろう。

- ・ これまでずっと、アルキビアデスとともにすごそう（話そう）とするわたしにダイモニオンが現われた。
- ・ したがって、そのときアルキビアデスとともにすごそうとすることは正しくなかった。
- ・ その理由は、まだアルキビアデスが自分を受け入れる用意ができていなかったことにある。
- ・ いまは、ともにすごそうとしてもダイモニオンは現われない。
- ・ したがって、いまアルキビアデスとともにすごそうとすることは正しい。
- ・ その理由は、アルキビアデスは自分を受け入れる用意ができていない。
- ・ ダイモニオンの許しを得てソクラテスとともにすごすものは進歩を遂げる。
- ・ したがって、アルキビアデスはわたしによって進歩を遂げる。

だからこそ、さきに引用したような、自信に満ちた臆面もない主張をソクラテスはすることができたのである。その推論はつぎのソクラテスの発言からうかがい知ることができる。

「わたしが思うに、あなたがもつと若くて、このような希望をいだくようになる以前には、神は話をするを許さなかったのだが、それは話が無駄にならないためだったのだ。だがいまは認めておられる。いまならあなたもわたしの言うことに耳を傾けてくれるだろうからね。」

ソクラテスは、ダイモニオンを契機として、みずからの議論によってひとつの結論にいたったのだ。ダイモニオンとともにロゴスにも従うソクラテスのこのありかたは、第二章でみたソクラテスの姿と重なる。そして、結果としてソクラテスの周辺の人物に利益を与えるのではあるが、ダイモニオンはあくまでもソクラテス自身が「しようとし

た」ことに生じた。そうだとすると、『第一アルキビアデス』でのダイモニオンは、他の真正のプラトン對話篇のそれと一致するのである。もし、對話篇の真偽性について述べることにすると、『第一アルキビアデス』は、この点では真作とみなされうるかもしれない。

しかしながら、ダイモニオンに関しては、なおひとつの反論が予想される。このアルキビアデスは、ダイモニオンに従いソクラテスとともにすごしたものの、その後の生きざまを見るかぎり、さきに述べたとおり、ソクラテスの教えを実践したとはとても思えない。つまり、「進歩を遂げ」たようには見えないのである。そうであれば、ダイモニオンは誤ったしるしを与えたことになりはしないか。クセノポンの考察でもみられたように、その最終的な結末から判断すると、「ソクラテスはダイモニオンについて誤ったことを語った (*epi tou deumou pseudemou*)」⁶⁵という批判が成立しうるだろう。すくなくとも、論敵からは。

この点について、プラトンの對話篇から直接に弁明を聞くことはできない。アルキビアデスが登場する對話篇の設定年代はじつに微妙である。彼が登場する『プロタゴラス』とこの『第一アルキビアデス』の對話の場面は、それぞれ、前四三三年、前四三二年となっており、そこにいるのは、ソクラテスとの交際を望む十代後半のアルキビアデスである。また、第三章で考察した『饗宴』の設定年代は、さきにも述べたが前四一六年であり、その年は、アルキビアデスによって推進され、彼の政治的・軍事的キャリアのなかで大きな転機となったシケリア遠征の前年にあたる。つまり、プラトンの真正對話篇に出てくるアルキビアデスは、それ以前の彼なのである。プラトンのソクラテスは、その後のアルキビアデスに関して、ほぼ沈黙したままなのである。⁶⁶

それに対して、さきに考察した『テアゲス』は、偽作ならではの答えを与えてくれている。「進歩する」のは、あくまでもソクラテスと一緒にいるときだけだ、と言うのである。

「しかしながら、多くのひとたちは、わたしとともにすごしているあいだは驚くべき進歩を遂げる (Baudouin *Enlaidou*) ものの、わたしから離れてしまうと、また他の誰とも交り映えしなくなるのだ。」

きつと、このソクラテスがアルキビアデスについて語ったとすれば、アルキビアデスもここで言われている「多くのひと」のひとりである、そう言うであろう。だが、もし徳は知であり、知は「確固たるもの」であるとするならば、このようなことは言えないであろうし、プラトンの報告するソクラテスであれば、そもそも一時的な改善を「驚くべき進歩 (Baudouin *Enlaidou*)」とまでは言わないであろう。もっとも、『テアゲス』の対話の場面は前四〇九年に設定されている。そこでの対話では、シケリア遠征にはダイモニオンの反対があったことも語られている。つまり、遠征を推し進めたアルキビアデスは、ダイモニオンに背いた人物ということになるのだ。よくない結果が訪れるのは当然であり、その原因はあくまでもアルキビアデス自身にあることになるであろう。

ソクラテス書簡集

さて、『プラトン著作集』とは別に、『ソクラテス書簡集』というものが、わたしたちに伝えられている。ソクラテスがやり取りしたとされる総数わずか七通の書簡であるが、今日その真偽性は何ら議論されることはない。なぜなら、偽作として見解が一致しているからである。成立年代は、早ければアレクサンドリア時代（前四世紀末―前一世紀末）、遅い場合は三世紀初頭の可能性もあるとされている。ずいぶんの幅のありようだが、それはソクラテスの影響の大きさを物語るものであろう。そのなかの一通に、ダイモニオンに言及されているものがある。「ソクラテスより」と題されたその書簡は、マケドニア王アルケラオス（在位前四一三―三九九年）へ宛てた返信という体裁で書かれている。ソクラテスを自国マケドニアに招請しようとする王アルケラオスの書簡に対する、ソクラテスによる断りの返

事である。招請を断る理由として、ソクラテスはダイモニオンを語るのである。

「かの神は (*ἐξείνот*) わたしがこの地を離れることを許さないので (*ἀφίστραθαι οὐκ ἐγώ*)。わたしはむしろのこと神に従わなければなりません。なぜなら、神は何がふさわしいかをわたしよりよく御存じなのです。わたしがあなたのところへ赴こうとしたときにその神はさしとめ (*βουλομένω ἀπέτρε μή λέναι*)。二度目にあなたがわたしに手紙をくださったときにも、それを禁じたのです (*ἀπηγόρευσέν*)」

さらにソクラテスはつづけて、自分が語るダイモニオンが一般に受け入れられていないことを認めながらも、それがもたらす有益さを、事例を挙げながらつぎのように語っている。

「もつとも、わたしがダイモニオンのことを語っても信じてもらえそうにないことは、驚くことではありません。これまで、他のひとたちがわたしにそんなそぶりを見せたことは少ないのです。デリオン郊外の戦いのさいにも、大部分のひとたちはわたしを信じようとはしませんでした。そのときわたしは軍務に服し、アテナイの全軍をあげての遠征に参加していたのですが、われわれが多数で一斉退却に移り、とある渡河点にさしかかったとき、わたしにいつものしるしが現われました (*βουλὴν μοι τὸ εὐαθὲρ ὀφείλον*)。そこでわたしは立ち止まり、こう言ったのです。「皆さん、そちらへ進むべきではありません。ダイモニオンが、かの声がわたしに現われましたから」。しかし大部分のひとたちは、あたかもわたしが時宜をわきまえずに冗談を言っているとも思つて腹を立て、まっすぐ行つてしまいました。ただ一部の少数のひとたちはそれに従つて、わたしと一緒に反対の道をとつたため、無事に家にたどり着いたのです。他のひとたちは、かれらのうちのひとりだけ帰還した

ひとによれば、全滅したそうです⁽⁴⁰⁾」

ここでの事例は、前四二四年、テバイを中心としたポイオティア同盟軍との戦いで、じつさいにソクラテスがアテナイ軍の一員としてポイオティア地方の町デリオンに出征し、それが失敗に終わり退却した、という史実をもとにしている⁽⁴¹⁾。ちなみに例のアルキビアデスはその時一緒で、馬に乗りながら、徒歩の重武装で従軍していたソクラテスを励ましたそうである⁽⁴²⁾。それはともかく、この書簡によると、デリオンからの退却のさいにダイモニオンがソクラテスに現われ、それに従わなかったものは害を蒙り、従ったひとたちは無事生還するという利益を得た、というのである。つまり、ソクラテスのみならず彼の周辺のひとたちをも巻き込む力として、ダイモニオンは描かれているのである。

たしかに、この個所でのダイモニオンはソクラテス自身の行為に生じたものであり、その点では真正のプラトン對話篇で語られているダイモニオンの特徴と一致する。また、その禁止の命令に従ったものを「進歩」させたと言えるかもしれない。しかしながら、やはり『テアゲス』との類似性の方が際立つように思われる。もたらす「進歩」がソクラテスの語る徳とは結びつかない点、そして何より、歴史的事実と関連させられている点である。もつとも、この「デリオンの戦い」それ自体は、プラトンやクセノポンの「ソクラテス書」のなかでも触れられている。だが、ここでダイモニオンに関するものは何ひとつ触れられていない⁽⁴³⁾。もし、そこにダイモニオンが生じていたならば、何らかの言及があつてもいいのではないか。後の人物による創作と判断するのが自然であろう。

ところが、ソクラテスのダイモニオンと関連させて語られるこの「デリオンの一件」は、後にも論じるが、プルタルコス『ソクラテスのダイモニオンについて』によると、かなり有名なこととされ、プルタルコスはシミアスにすぎのように語らせている。

「何度も、しかも多くのひとから聞いている。じつさいその話がもとで、ソクラテスのダイモニオンは、ほとんどのアテナイ人に知られることになったのだ」⁴⁰

さらにまた、ここでシミアスが言う「何度も、しかも多くのひとから聞いている」この一件は、前一世紀に生きたかの有名なキケロの、『占いについて』という著作のなかにも見いだすことができるのである。ラテン世界でも、ソクラテスのダイモニオンは、ある種、形を変えて、知れわたっていたようだ。

キケロ『占いについて』

著者キケロ（前一〇六年―四三年）について、ここで多くを述べる必要はないであろう。紀元前一世紀、共和政ローマで活躍した政治家であり、弁論家であり、哲学者である。数多くの著作や弁論が残されているが、その多さが逆にわざわざいとなったのか、キケロ自身の哲学的立場はあまり明確ではなく、一般には折衷主義者と理解されてきた。⁴¹

『占いについて』は、キケロの小作品である。日本語の翻訳『キケロ―選集』のなかには、残念ながら含まれていない。もちろんこの書は、本論で「ソクラテス擬書」と呼ぶものとは性格を異にする。キケロはソクラテス、およびソクラテスの主張を哲学的考察の対象として取り上げているのである。

『占いについて』は、その名が示す通り、占いが主題である。ソクラテスのダイモニオンも、そのひとつとして位置づけられている。そのさいキケロの出発点となったのは、「古代の人たちは、証明された議論（ラティオ）にもとづくよりも、むしろ不思議な仕方ですされた事柄にもとづいて、さまざまなものごとの確証を得ていた（*veteres rerum magis eventis moniti quam ratione docti probaverunt*）」⁴²という思いである。そして、そのひとりとしてキケロはソクラテスの名前を挙げている。

『占いについて』の議論は対話形式で展開され、キケロの弟であるクイントゥスがまず、占いを擁護するかたちで、占いをふたつに区別する。⁽⁴⁷⁾ひとつは、「技術によるもの」であって、観察によって、すでに知られているものからまだ知られていないことを見いだそうとするものである。他方、もうひとつを、「生まれつきの自然本性によるもの」とクイントゥスは言う。彼の説明によると、神的な魂を持つ人の自然本性は、自然のなかに満ち溢れている神的なものに触れることができる。それが占いや予言というかたちで、一部のひとに語られるのである。だが、それが可能なのは、魂が身体的な拘束から解放された状態にあるひと、すなわち「純粹で敬虔な魂 (castus animus purusque)」⁽⁴⁸⁾の持ち主のみである。そして、まさにそういった人物として、クイントゥスはソクラテスを挙げ、つぎのように語っている。

「言うまでもなく、わたしたちに受け入れられているソクラテスの魂こそ、まさにそういったものなのである。彼の弟子たちが書いた本のなかで (in libris Socraticorum)、ソクラテスみずからがしばしば語っていたことであるが、ある種の神的なもの (divinum quiddam) のが存在する。それをソクラテスはダイモニオンと呼んでいた。ダイモニオンは、いつも何かを命じようとは決してしなかったが、しばしば彼をひきとめようとした (cum semper ipse paruerit nunquam impellent; saepe revocanti)」⁽⁴⁹⁾

ここで、「ソクラテスの弟子たち」と複数形が用いられていることからすると、さまざまな「ソクラテス書」をもとに、クイントゥスはソクラテスおよびダイモニオンを説明しているのであろう。しかし、どうやら彼が参照したもののなかには、「ソクラテス擬書」も含まれていたようである。クイントゥスはつづけて、さきの「デリオンの一件」を含むふたつの事例を示している。

「これもソクラテスに関して記述されていることである。彼が、友人であるクリトンが目眼帯をしているのを見て、どうしたのかと尋ねたところ、クリトンは、畑を歩いていたときに、しなんでいた木の枝がはねかえり、それがふりかかり自分の目にあたったのだと答えた。するとソクラテスは、「それはなぜかという、わたしにいつものダイモニオンが現われて (praesagitatione divina)、あなたに戻るように言ったのに、あなたは聞かなかったからだ」と言ったのである。また、これもソクラテスに関することである。ラケスの指揮のもと、不運な戦いがデリオンでなされたあと、ソクラテスは指揮官とともに退去していた。そして三叉路にやってきたそのときである。ソクラテスは、他の人たちが選んだ道を通って退去しようとはしなかった。彼は、なぜ同じ道を進まないのかと尋ねられると、神によって決められたことだ (deterrenti se a deo)、と答えたのである。そして、ソクラテスとは別の道を通って退去したひとたちは、敵の騎兵隊に出くわすことになった」⁶⁰

ここに登場する人物の名前は、クリトンもラケスとともに、プラトンの対話篇でなじみのひとたちである。⁶¹だが、最初のクリトンの事例は、他では見いだされない。ただ、その事例にしても、「デリオンの一件」にしても、「テアゲス」で言われていたように、ソクラテスのみならず彼の周辺のひとたちをも巻き込む力としてダイモニオンは描かれているのである。そして、事例は他にもたくさんあることを、クイントゥスはつぎのように述べる。

「ソクラテスによって驚くべき仕方で予言された (quae mirabiliter a Socrate divinata sunt) たいへん多くの事例が、アンティパトロスによって収集されている。だがそれらについては、触れないでおこう。あなたにもよく知られていることだし、わたしにとっても、それらを思い出す必要はないのだから」⁶²

このアンティパトロスとは、前二世紀初頭に活躍したストア派の哲学者で、この章のはじめにでてきたパナイテオスの前にストア派の学頭をつとめた人物である。ここで言われているようなかたちで、クイントウスの議論はダイモニオンからはなれてしまい、また、アンティパトロスの収集したものが今日のわたしたちに伝えられていないのは、たいへん残念なことである。⁶⁰その内容を、わたしたちは知ることができない。だが、「ソクラテスによつて驚くべき仕方で予言された」という表現は注目すべきかもしれない。

ところで、キケロによるソクラテスについての言及と言えば、まず思い起こされるのは、『トゥスクルム荘対談集』のなかの、あまりに有名なつぎの一節であろう。

「ソクラテスは、はじめて、哲学を天上から引き下ろして、町に据えつけ、さらには家のなかに導き入れ、人生や道徳について、また善や悪について探求するように仕向けた」⁶¹

ここで言われている「善や悪について探求する」ソクラテスは、プラトンやクセノポンの著作に基づくものである。わたしたちにもたいへん馴染みのものである。さらにキケロは、そのつづきでソクラテスには「多種多様な議論(multiplex ratio)」⁶²があつたと書いているが、また別の著作では、ソクラテスの議論のあり方について、プラトンを典拠としながらつぎのように述べている。

「ソクラテスが常としていたのは、質問をしたり尋ねたりすることによつて(percontando atque interrogando)、議論している相手の臆見を誘い出し、相手が答えたことについて何か言うべきことがあればそれを言うといふことであつた」⁶³

つまり、「質問したり尋ねたりすること」とは、「対話」と言い換えていいだろう。そのようなロゴス（ラティオ）の営みを「常としている」ソクラテスを、キケロも一方で理解していたはずなのである。そうだとすると、やはり『占いについて』のなかで描かれているソクラテス、すなわち「証明された議論（ラティオ）」にもとづくよりも、むしろ不思議な仕方で示された事柄にもとづいて、さまざまなものごとの確証を得ていた」古代のひとのひとりとしてのソクラテス、また「驚くべき仕方で予言する」ソクラテスとは、相容れないようにも見えるのである。そういった点についてキケロはどのように考えたのか、謎として残る。

ダイモニオン伝説

さて、本章でとりあげた作品からは、真作である可能性が残る『第一アルキビアデス』を別にとすると、それらに共通する特徴的な「ソクラテスのダイモニオン」が見えてきたように思われる。まず記述のスタイルとして、ダイモニオンの事例がつぎつぎと列挙されるというのは、「ソクラテス書」にはなかったことである。これは、ソクラテスのダイモニオンそれ自体がひとつの主題となったことを意味するであろう。では、「ソクラテスのダイモニオン」の身はどうか。繰り返しとなるが、そのダイモニオンは、ソクラテスがしようとしたことに生じるのではなく、他のひとがしようとしたことにも生じるという点、そして、ダイモニオンの力が、ソクラテスの周辺のひとたちにも大きな影響を与えるという点、これら二点を特徴として挙げることができる。こちらのほうは何を意味するであろう。

まず言えることは、ソクラテス自身のロゴスの局面が、すくなくともひとつは失われるということである。どういうことか説明しよう。第二章で、プラトンの報告をもとにソクラテスのダイモニオンとロゴスの関係を考察したとき、あるひとつのソクラテスの行為のはじまりとおわりの二局面に、わたしたちはロゴスによる関与を見た。まずひとつ、ダイモニオンはソクラテスの何らかの行為にさいして生じるのであるが、それはあくまでもソクラテスが「しようと

する」ことに対してであつて、その「しようとする」にいたる局面はロゴスによつて決定されているのである。わたしたちはそれを、「はじめのロゴスの局面」として理解した。もうひとつは、ダイモニオンの発現の有無に応じて、「しようとしていた」ことの善し悪しをソクラテスが自分のロゴスで考察する局面である。それを「あとのロゴスの局面」と呼ぶことにしよう。⁶⁸つまり、ソクラテスはダイモニオンとは別に、それと両立する仕方、ロゴスを重んじていたはずなのだ。しかしながら、本章で明らかになつたダイモニオンのように、もしそれが他人の「しようとする」ことに生じるのであれば、そこにソクラテスのロゴスはまったく関与しないことになる。すなわち、「はじめのロゴスの局面」は成立しないのである。もつとも、「あとのロゴスの局面」は存立しうるであらうが。

では今度は、そのようなダイモニオンに基づくソクラテスの忠告を受ける、他人の側に身を置いて考えてみよう。そのひとは、「しようとする」ことをロゴスによつて考察することはできる。また、ダイモニオンに基づくソクラテスの忠告が与えられたときに、それを契機とした考察もできる。だがそのさいのダイモニオンへの信頼を、どのようにして獲得しているのであろうか。ダイモニオンがソクラテス自身の行為に生じた場合、その信頼性は、他ならぬソクラテス自身の経験によつて得られたはずである。「子供のころから」とソクラテスが述べていたように、ロゴスとの両立も自らの経験のなかで確信されていたはずである。しかし他方、他人の側からすると、ダイモニオンへの信頼はソクラテスという人物への信頼によつてのみ成立する。だからこそ、キケロはダイモニオンを、特別な人間によつてのみ可能となる「占い」に位置づけたのであろう。ダイモニオンは、キケロが危惧したように、ロゴスとは遠く離れたものと受け止められるであらう。また、それを語るソクラテスは、もはや単なる占い師と映るかもしれない。後代に見られるこのようなダイモニオンの特徴は、おそらく「ソクラテス書」由来するのだろう。そしてもし、さらに出所を探るとすれば、それに該当するのは、わたしはつぎのクセノポンの発言ではないかと考えている。

「そして、ソクラテスは、ダイモニオンがしるしを告げると (ὅτι τοῦ δαιμονίου προσματινότερος) 一緒にいるひとたちに、あることはするように、またあることはしないようにあらかじめ勧告した (προγγήσασθε τὰ μὲν ποιεῖν, τὰ δὲ μὴ ποιεῖν)」⁶⁹

さきに第四章でこの発言を考察したとき、ここには禁止だけではなく、ダイモニオンによるある種の積極的な忠告が語られているのではないかと論じた⁶⁰。けれども、それはあくまでもソクラテスの行為に生じたダイモニオンであった。そのことはクセノポンの文脈から明らかである。だが、この発言だけを切り取って見た場合、ダイモニオンの他人への関与が際立つようにも思われる。きっと「ソクラテス擬書」を書いたひとたちは、そのようなかたちでこの証言を理解したのではないだろうか。というのは、この章で考察した『擬ソクラテス書簡集』のなかに、ダイモニオンとの関連で語られるつぎのようなソクラテスの言葉があるのだ。

「また、あるひとたちには多くのことを、個人的にも、わたしはあらかじめ勧告しましたが (προγγήσασθε)、それは神の導きによって (διδοκοντορ του θεου) のことです」⁶¹

ここで「あらかじめ勧告する」と訳した言葉は「予言する」という意味でも用いられる。こちらの文脈ではむしろそちらの方が適訳かもしれない。するとここで見受けられるのは、「多くのことを神の導き、すなわちダイモニオンによって予言するソクラテス」である。そして、一度そのようなダイモニオンが描かれたとすれば、その後の成り行きは容易に想像がつくだろう。ときにはシケリア遠征やデリオンの戦いといった歴史的事実と関連させられながら、ときにはソクラテスの友人との日常的なエピソードとして、ダイモニオンは語られる、いや創作されるようになった

のではないか。もはやそこに登場するのは「予言者ソクラテス」である。だからきつと、ケケロの『占いについて』のなかで、ダイモニオンは占いのひとつとして取り上げられ、「ソクラテスによって驚くべき仕方で予言された (quae mirabiliter a Socrate divinata sunt)」といった言い方がされたのだ。

もちろん、「予言者ソクラテス」という像は、けっしてこれら後代の記述に独特なものではない。というのは、プラトンの『パイドロス』のなかでも、前章までの考察でもいくどかふれたが、じっさいにつきのように語られていたからである。

「ところで、わたしは占いができるのだ (εἰμι ὄν οὖν μαντις)。あまりうまくはないがね。しかしちようど字の下手な人と同じで、ただ自分だけのためなら、それで十分なのだ (ὅσον μὲν ἐκαστὸν ἰσχύει)。
……じっさい、魂というものは、一種の予言の力をもっているのだ」^(註)

このソクラテスの発言は、第二章で引用した『パイドロス』の一節のつづきである。つまり、まさにダイモニオンについて語られたその延長線上での言葉である。プラトンの描くソクラテスもまた、ダイモニオンを予言に関連することとみなしていたのだ。さらにそれは、第四章、クセノポンの報告でも顕著に見られたことでもある。しかしながら、すくなくともプラトンの描くソクラテスは、もう少し謙虚であったように見える。というのは、そのソクラテスは、「ただ自分だけのためなら、それで十分なのだ」と語っていたからである。そこに、ソクラテス周辺のひとたちへの直接的な影響はかえりみられていない。ましてや、他人の行動にさいしてダイモニオンが現われるなど、一言も語っていないのである。

するとどうであろうか。ソクラテスと時代をともにしたひとたちの証言にはまったく見いだされず、後の著述家た

ちにおいては、逆にそれが特徴ともいえるほど頻繁に語られるのであれば、ひとつの推測は可能であろう。おそらく、わたしが思うに、後の時代のひとたちは、ソクラテスのダイモニオンをもとにしながらも、さまざまな事例をいわば創作し、そのなかで予言という側面を強調するようになったのではないだろうか。それは結果として、より多様な「ソクラテス話」を形成していくことになったのであろう。これはもはや、ソクラテス自身が伝説となった、と云つていい。そしてダイモニオンは、そのような「予言者ソクラテス」を何よりも特徴づけるものだったのである。そういう意味では、それを「ダイモニオン伝説」と呼んでもいいだろう。そしてそれは、第四章でダイモニオンの由来として論じた「ダイモン伝説」とも別物であると言わねばならない。

だが問題が生じる。いや、問題はふたたびここでも想起される。というのは、そのようなかたちでダイモニオンが強調されたソクラテス像からは、彼のもう一方の側面、すなわち、自分の行為をみずからのロゴスによつて律するという「ロゴスの立場」がほとんど薄らいでいくからである。ダイモニオンをもとに予言をするソクラテスは、「ロゴスのひと」ではなかったのか。これこそ「ガラクシドロスの問い」である。わたしは、キケロが『占いについて』のなかで最初に語った「古代のひとたちは、証明された議論（ラティオ）にもとづくよりも、むしろ不思議な仕方で示された事柄にもとづいて、さまざまなものごとの確証を得ていた」という言葉もまた、そういったことに向けられていたのではないかと考えている。最後に、この問いを正面から受け取り、それに対する答えを与えたプルタルコスPlutarchusの著作を考察することしよう。その著作は、『ソクラテスのダイモニオンについて』である。

註

(1) デイオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』第二巻六四—一四。

(2) ここに言及されている人物のほか、アレクサメノス、アリストティポス、ケベス、クリトン、グラウコン、パイドン、シミアス、シモンの断片が、以下の書に収集されている。Giannantoni, G., *Socratis et Socraticorum reliquiae*, Naples, 1990.

- (3) 納富信留『哲学者の誕生』筑摩書房、二〇〇二年、一四〇頁参照。納富氏は「ソクラテス文学」と呼び考察している。
- (4) ある意味で、今日までずっと続いていると言ってもいいだろう。
- (5) 北嶋美雪「『テアゲス』解説」『プラトン全集』第七巻、岩波書店、一九七五年、二三七頁。最近の研究では、アリストテレス『エウデモス倫理学』が「テアゲス」の一部を前提していると思われ、遅くとも前三四五年には成立していたとする見解が有力なようである。Platon *Thages*. *Übersetzung und Kommentar von Döring, K., Göttingen, 2004, S. 79.*
- (6) 「どうも本題はソクラテスのいわゆる「ダイモーンの合図」ということにあるように思われる」という主張がある。千葉茂美「作品解題『テアゲス』」『プラトン全集』第四巻、角川書店、一九七三年、四八五頁。他方、ダイモニオンに関する記述は、あくまでも「議論の本筋からは逸脱した、実例を用いての説明(digestive illustration)」にすぎないとする解釈もある。Bailey, J., *The Socratic Thages*, Hildesheim, 2004, p. 3.
- (7) 擬プラトン『テアゲス』一二七A九。この言葉は「あとの『テアイテトス』一五一A一一五の引用でも用いられている言葉である。
- (8) 擬プラトン『テアゲス』一二八D二一五。
- (9) プラトン『ソクラテスの弁明』三一D二一四。比較をはつきりさせるため、さきの引用時とは文体を変えている。
- (10) これらふたつの証言に関しては、擬『テアゲス』の作者がプラトン『ソクラテスの弁明』をもとにして書いたと推測されるのが一般的であるが、他の可能性を探ろうとする試みもある。Bailey, p. 267-268.
- (11) 擬プラトン『テアゲス』一二八D五―七。
- (12) この引用では、「相談にくる」としか言われていないが、ソクラテスの知人が「何かをしようとして」相談にくるといふことが、つぎの引用から分かる。ダイモニオンは、知人が「くしようとする」ことに生じる、と述べているのである。
- (13) 擬プラトン『テアゲス』一二八E一―三。
- (14) さきに考察したクセノポン『ソクラテスの想い出』によると、ソクラテスに勧められて政治家になったと言われている。クセノポン『ソクラテスの想い出』第三巻第七章一参照。だが、皮肉なことに、彼が政治の世界で師事し、「三十人独裁政府」を樹立したクリティアスは、「青年たちを腐敗させる」というソクラテスへの訴状で書かれている。「青年」のひとつりとして真っ先に思い浮かべられる人物なのである。クセノポン、同書、第一巻第二章一二以降参照。
- (15) 擬プラトン『テアゲス』一二八E八。

(16) ティマルコスという名前の人物については、つづく第六章で考察するプルタルコス『ソクラテスのダイモニオンについて』のなかでも出てくる。その関連については、同箇所を参照。

(17) 同書、一二九B五―C六。

(18) シケリア遠征とは、前四一五年―四一三年に、本論で後に出てくるアルキビアデスの提案によってアテナイ軍が派遣されたこと。それが惨敗であったことは、トゥキュディデス『歴史』第六、七巻を参照。そのさいに、ソクラテスがダイモニオンにもとづき反対したことは、プルタルコスの『ニキアス伝』一三九、『アルキビアデス伝』一七五でも言及されている。

(19) エペソス遠征とは、前四〇九年の戦いのこと。クセノポン『ギリシア史』一一二を参照。サニオンという人物については、そこでは見いだされない。

(20) 擬プラトン『テアゲス』一二九E―一五、六一七。

(21) プラトン『テアイテトス』一五一A―一五。

(22) 「交わる」の主語がソクラテスであって、友人たちはその対象であることが (*enivou...: oive(nau)*) という表現から明らかである。

(23) 前節で考察したクセノポンにも、他人の行為に対するダイモニオンが語られていると解釈可能な箇所がある。(北嶋美雪『「テアゲス」解説』『プラトン全集』第七巻、岩波書店、一九七五年、二三二頁)。だが、わたしは『テアイテトス』で言われているような間接的なものと理解する。むしろわたしは、そのクセノポンの証言をもとに、のちにこのような事例が作り出されていったのではないかと解釈する。本論文五四頁以降参照。

(24) Crisostomus, Dittmarがそのように主張している。Paton *Euvres completes*, tome I, Budé, 1985, p. 49. 他方、強く真作であることを支持するものとしては以下を参照。Denyer, N., *Plato Alcibiades*, Cambridge, 2002, p. 11-26.

(25) 「彼の記憶を記述したすべての人たちのあいだで、悪徳においても美德においても、彼をしのぐ者はいなかったという見方が確立している」といった、アルキビアデスに関する記述もある。ネボス『英雄伝』「アルキビアデス伝」一。

(26) デイオゲネス・ラエルティオス、『ギリシア哲学者列伝』第二巻六一、一〇八、第六巻一八参照。

(27) 田中美知太郎『「アルキビアデス」解説』『プラトン全集』第六巻、岩波書店、一九七五年、二〇九頁。

(28) トウキュディデス『歴史』第六巻一五参照。その生涯についてはプルタルコス『英雄伝』「アルキビアデス伝」が、物語としてではあろうが、詳しく興味深い。

- (29) 「青年たちを墮落させる」という罪状で言われている「青年」の具体的なひとりとして、クリティアスとともに名があげられる。それらへの弁明は、クセノポン『ソクラテスの思い出』第一巻第二章二四を参照。
- (30) 擬プラトン『第一アルキビアデス』一二四C五—一〇。
- (31) 同書、一〇三A—B二。
- (32) 同書、一〇五B、一〇六C。
- (33) 同書、一〇五E六—一〇六A一。
- (34) クセノポン『ソクラテスの思い出』第四巻第八章一—四。
- (35) 『ゴルギアス』のなかでソクラテスは、アルキビアデスのきまぐれについて、「あのクレイニアスの子（アルキビアデス）はその時々で異なったことを口にするが、哲学の言うことはいつも同じである」（四八一B）といった言及をし、また、人々の政治家への対応が知に基づかない場合という前提で、「アルキビアデスを攻撃することになるだろう」（五一九A）と述べている。
- (36) 擬プラトン『テアゲス』一三〇A二—四。
- (37) プラトン『メノン』九八A六。
- (38) 内山勝利『哲学の初源へ』世界思想社、二〇〇二年、二四七頁。
- (39) 『ソクラテス書簡集』第一書簡七三—六。
- (40) 『ソクラテス書簡集』第一書簡八一九—九一。
- (41) トウキユディデス『歴史』第四卷九三—一〇〇参照。
- (42) プラトン『饗宴』二二—A参照。
- (43) クセノポン『ソクラテスの思い出』第三卷五—四参照。プラトン『饗宴』二一九E—二二二C、『ラケス』一八一B参照。また、歴史家トウキユディデスの書『歴史』では、ソクラテスへの言及すらない。
- (44) アルタルコス『ソクラテスのダイモニオンについて』五八一E。
- (45) わたし自身は、前世紀の後半からよく言われるようになった「懐疑主義者キケロ」という解釈に賛同するが、ここでは触れることができない。
- (46) キケロ『占いについて』第一卷五—一二。
- (47) 同書、第一卷三四参照。

- (48) 同書、第一卷二二一—二七。
 (49) 同書、第一卷二二二—二四。
 (50) 同書、第一卷二二三—二二。
 (51) クリトンは既出。ラケスはアテナイの將軍で、プラトンには「ラケス」という、勇気を主題にした対話篇がある。
 (52) キケロ『占いについて』第一卷一三三—一三五。
 (53) ストア派のひとつたちに関して言えば、クリュシッポスの断片にいくつかダイモーンへの言及があるが、ソクラテスのダイモニオンとの関連ではない。後のエピクテトスには、興味深いダイモーンへの言及が見られるが、それはまたの機会に論じる。
- (54) キケロ『トウスクルム対談集』第五卷二〇—二二—一一。
 (55) 同書、第五卷一一—一。
 (56) キケロ『善と悪の究極について』第二卷二—三—六。
 (57) 拙著『ソクラテスのダイモニオンについて』(二)——神靈につかれた哲学者』『龍谷大学論集』第四七四・四七五合併号、二四六頁。
 (58) 拙著『ソクラテスのダイモニオンと理性(ロゴス)』『龍谷哲学論集』第二四号、二〇一〇年、一七頁以降参照。なお、本論で言う「最初のロゴスの局面」は、二六頁の(一)に、「あとのロゴスの局面」は(四)に該当する。
 (59) クセノポン『ソクラテスの想い出』第一卷第一章四三—六。
 (60) 拙著『ソクラテスのダイモニオンについて』(三)——クセノポンのソクラテス像』『龍谷大学論集』第四七九号、一〇七頁以降参照。
- (61) 『ソクラテス書簡集』一—〇—一三。
 (62) プラトン『パイドロス』二四二C三—七。
 (63) キケロ『占いについて』第一卷五—一二。

キーワード ギリシア哲学 ソクラテス 理性

ソクラテスのダイモニオンについて(四)(田中)